

須弥山世界に関する諸説と 東大寺大仏蓮弁須弥山図について

外村 中

はじめに

いわゆる三千大千世界の中に十億存在するといわれる須弥山世界の内の一つ（すなわち一つの四天下）は、地球のような一つの惑星に相当する。それは、仏教が説く實在論的宇宙論においては、宇宙空間の基本単位ともいえるものである。そして、我々人類が住む須弥山世界の中央にそびえるとされる須弥山は、相対的には全宇宙の中心とも見なしうるものである。

近年においては、そもそもは声聞乗・説一切有部非主流派（非正統派）の仏典である『俱舍論』の内容のみ（あるいはほぼそのみ）をもつて仏教の須弥山世界を議論する研究者が多いようである。¹ しかしながら、『俱舍論』とは明らかに異なる内容を有する仏典もあるので注意が必要である。その違いは、宇宙論における意味合いとしてなら、あるいはそれほど重要なものではないかもしれないが、図像にした場合、大きな違いを生じる可能性があるので、無視はできないであろう。

また、たとえば大乘・瑜伽行唯識派の『仏地経論』によれば、全宇宙空間（法界）は浄土であると解釈されないことはない。その内容は、少し言葉を足して意識すれば、おおよそ次のとおりである。

『仏地経論』巻一「このように浄土は、（我々人類が住む須弥山世界を含む）三界（無色界と色界と欲界からなるところ）と同じところなのであろうか。あるいは、三界とは別のところなのであろうか。ある説によれば、それぞれ別のところである。なぜならば、浄土は淨居天の上にあるとも、西方などにあるともいわれるからである。また、ある説によれば、同じところである。なぜならば、浄土は限りなく広がり全宇宙空間にあまねく広がっているといわれるからである。以上について、真実と見なすべき考え方は次のとおりである。浄土はまさに受用身の仏（条件が揃えば姿を現してくれるといわれる仏）が在すところで、全宇宙空間にあまねく広がっており、全宇宙空間のどこにでも存在するものである。したがって、三界を離れているということはできないが、また、三界そのものであるということもできない。浄土は菩薩の願いにしたがい現されるとされるところで、あるいは色界の淨居天の上にあるともいえるが、あるいは西方などにあるともいえ、どこか定まったところにあるというものではないのである。²」

以上は、我々人類が住む須弥山世界は、見ようによつては、浄土の一部であるとする考え方が成立していたことをしめすものであり、注目に値しよう。『仏地経論』は、唐の玄奘（西暦六〇〇／六〇二―六六四）が六四九年に訳出したもので、法相宗において重んじられた仏典である。法相宗は東アジアにおいて最も有力であった大乘の宗派の一つであ

る。したがって、須弥山世界は、宇宙空間の基本単位としてだけでなく、浄土ひいては聖地を考える上でも重要な空間であることになってくるのである。聖地はどこにあるか、あるいは、如何なるものであるか、という質問に対して、『仏地経論』に説かれる立場をとれば、我々人類が住む須弥山世界は至る所すべて実は聖地なのであると答えることも可能になってくる。では、瑜伽行唯識派ひいては法相宗が想定していた須弥山世界は如何なるものであるか。この点は確認しておく必要がある（第四章に後述）。いずれにせよ、『俱舍論』に記された須弥山説だけでは十分ではないであろう。

そこで、小稿では、以上に述べた点などにも留意しながら、須弥山世界に関する諸説に見られる図像学的な内容の違いをできる限り詳しく明らかにしたい。それで、まずは諸仏典を紹介しその内容を整理する。そして、聖地表象の様態についての研究の一環として、東大寺大仏の台座の蓮弁（図1、図2）に描かれている須弥山世界の図（図3、以下「蓮弁須弥山図」と呼ぶ）を分析し初歩的な考察を試みる。³ここで、蓮弁須弥山図を取り上げるのは、それが日本ひいては東アジアにおける最も代表的な図例の一つといえるからであり、かつ状態がよいので分析が行いやすいからである。さらには、中央アジアにおける図例を理解する上でも重要になってくる可能性があるからである（第一章に後述）。蓮弁須弥山図は基本的（実質的）には『俱舍論』に依拠するものであるとうと筆者は考えるが、声聞乗の『世記経』によるものであるとする説もある。⁴それゆえ、『俱舍論』と『世記経』の内容の違いについても論及する（第四章に後述）。

以下小稿では、①『俱舍論』、そして②声聞乗・阿含經典である『世記経』、③同じく『起世経』、それから④大乘・華嚴宗が依拠する『華嚴経』、⑤大乘・法相宗が依拠する『瑜伽論』、⑥東アジアにおいては大乘の最も基本的な仏典の一つとされる『大智度論』、さらには⑦声聞乗・説一切有部主流派（正統派）の『婆沙論』、⑧同じく『順正理論』、⑨声聞乗・正量部の『立世論』、⑩声聞乗・部派不明の『正法念处経』の内容と、蓮弁須弥山図に描かれているところとを比較検討する（『資料集』を参照⁵）。

第一章、須弥山世界に関する内容を有する 代表的な仏典

まずは、小稿で取り上げる仏典が如何なるものであるか確認しておく⁶。なお、以下の内、須弥山世界について梵本のみで検討が可能なものは『俱舍論』と『瑜伽論』しかない。この点は、漢訳仏典が東アジアのみならずインドにおける考え方を検討する上でも大いに参考になるであろうことを意味するものといえよう。

①『俱舍論（阿毘達磨俱舍論）』大正二九、第一五五八（『資料集』九頁、三一一―一二図）。原典は、声聞乗・説一切有部に属していた世親（四世紀から五世紀）がカシミールに拠点を置いていた説一切有部主流派の教理を批判するために、経量部の説を取り入れながら著したもので、ガンダーラを拠点とする説一切有部非主流派の論書といえるものである。

梵本が伝わる。漢訳『俱舍論』は、唐の玄奘が六五一年から六五四年に訳出したもので、世親の著、玄奘の訳、さらには須弥山世界についての内容が充実していることもあり、東アジアにおいては参照されていることが多いのである。管見の限りでは、蓮弁須弥山図のみならず今日に伝わる東アジアにおける図例の多くは、玄奘のこの訳によるものと見てよさそうである。なお、陳の眞諦（四九九―五六九）が五六三年から五六七年に漢訳した『俱舍釈論（阿毘達磨俱舍釈論）』大正二九、第一五五九もある。玄奘の訳とは、（3）（『資料集』項目番号3およびそれに対応させた小稿の第三章（3）を参照。以下同様。）須弥山の断面についての内容に違いが見られる。⁷その内容は、玄奘訳『婆沙論』の内容を確定することを難しくするものである。また、『俱舍論』の内容が華嚴宗が依拠する仏典の内容と図像学的に見て唯一齟齬をきたす可能性がある点として、（4）須弥山山頂の四つの峰の位置があげられる。この点は蓮弁須弥山図を分析する上で注意すべき点となろう。

②『世記経』（『仏説長阿含経』所収）大正一、第一（『資料集』一一頁、三一―一六図）。原典は、声聞乗の阿含經典の一つで、法蔵部によるものらしく、遅くとも二世紀には成立していたと考えられている。⁸梵本（原語本）は伝わらない。漢訳は、後秦の仏陀耶舎（五世紀頃）と竺仏念（五世紀頃）の共訳による。ところで、先に述べたが、蓮弁須弥山図は『世記経』に依拠するとする近年の説がある。⁹その説は、中央アジアのキジル石窟に見られるいわゆる宇宙仏シヤカムニの図像も『世記経』によるとし注目されている。¹⁰しかしながら、キジルでは説一切有部が有力で

あったことは文献より明らかであるが、法蔵部の活動は不明である。¹¹したがって、宇宙仏の図像に法蔵部の『世記経』の内容が採用された理由はわからない。筆者は思うに、その説は検証し直して見る必要があるのではなからうか。小稿では、その手段の一つとして、その説が『世記経』を如何に理解しているかを確認するために、『世記経』の内容と蓮弁須弥山図とを比較する（第四章に後述）。あわせて法蔵部と説一切有部（『俱舍論』、『婆沙論』および『順正理論』）の考え方の違いも明らかにする。両者には、（1）須弥山の高度、（3）須弥山の断面、（6）須弥山を取り囲む山脈の数、（7）大鐵圍山に相当する山脈の存在（位置）、（8）須弥山を取り囲む山脈の様態、（9）四大洲の形、（11）帝釈天の善法堂の位置、（13）無熱惱池（阿耨達池）の四つの獸口の配置、（16）地獄の位置など多くの点で相違が見られる（第三章を参照）。

③『起世経』大正一、第二四（『資料集』一二頁、三一―一七図）。原典は、声聞乗の阿含經典の一つであるが、部派は不明で、紀元後に成立したものであらうとされる。梵本（原語本）は伝わらない。漢訳は、隋の闍那幅多（六世紀頃）らが五八五年から六〇〇年に訳出したものである。『世記経』に近い内容を有するが、（3）須弥山の断面は上辺が長い台形（のよう）であることを明記しているほか、（5）須弥山側面の張り出し、（13）無熱惱池（阿耨達池）の四つの獸口の配置、（17）閻魔王の居所の位置などに違いが見られる。

④『華嚴経（大方広仏華嚴経）』大正九、第二七八および大正一〇、第

二七九(『資料集』一四頁、三一―一一図)。原典は、大乘の代表的な仏典で、大本としては四世紀半ば頃までにインドあるいは中央アジアにおいて成立したものとされるが、その内容の一部は一〇〇年前後には成立していたとも考えられている。¹² 全宇宙空間に充滿するという目に見えない仏身(法身)との関連から、實在論的宇宙空間の全貌を体系的にまとめ上げた重要な仏典である。梵本は完本の形では伝わっていない。とくに宇宙の構成について説く章(『六十華嚴』盧舍那仏品に相当する箇所)などの梵本は散逸している。一方、漢訳の完本は二つあり、梵本からは知られない内容が確認でき貴重である。一つは『六十華嚴』大正九、第二七八と呼ばれ、東晋の仏跋跋陀羅(三五九―四二九)が四一八年から四二〇年あるいは四二一年に訳出した六十卷本である。もう一つは『八十華嚴』大正一〇、第二七九と呼ばれ、唐の実叉難陀(六五二―七一〇)が六九五年から六九九年に訳出した八十卷本である。両漢訳は、大乘・華嚴宗が依拠する仏典であるが、『六十華嚴』には宇宙の構成に関する内容に重大な欠落などが見られる。¹³ あるいは漢訳時における意図的な欠落の可能性も否定できないので、その理由については、今後の研究が必要である。なお、蓮弁須弥山図は、日本の華嚴宗の大本山である東大寺の本尊が坐す台座に取り付けられた蓮弁に描かれたものである。したがって、蓮弁須弥山図と『華嚴経』の内容との関係は確認しておかなければならないであろう(第四章に後述)。

⑤『瑜伽論(瑜伽師地論)』大正三〇、第一五七九(『資料集』一三頁、三一―一九図)。原典は、大乘・瑜伽行唯識派の根本論書の一つである。

一説によれば、弥勒菩薩が説いたところを無著(四世紀)が四世紀前半頃にまとめたものという。梵本が伝わる。漢訳は、玄奘が六四六年から六四八年に訳出したもので、大乘・法相宗が重んじる仏典の一つである。管見によれば、仏身論や諸天についての考え方は『華嚴経』に近いようである。また、今日に伝わる同派による仏典の内では、須弥山世界について最も詳しい内容を有するものと思われるので、その内容は押さえておく必要がある。基本的には、『俱舍論』の内容とほぼ同じであるが、(11)須弥山山頂にある帝釈天の善法堂の位置、(12)四天王の居所の位置を須弥山中腹の張り出し(すなわち下から第四層目の張り出し)とはせず、須弥山を取り囲む七つの山脈の内の最も内側の山脈とする点などに違いがある。

⑥『大智度論』大正二五、第一五〇九(『資料集』一三頁、三一―一〇図)。原典は、大乘・中観派の竜樹(一五〇―二五〇あるいは二四三―三〇〇)が『大品般若経(摩訶般若波羅密経)』大正八、第二二三の原典を注釈したものであると伝えられるが、正確なところはよくわからない。梵本は伝わらない。漢訳は、後秦の鳩摩羅什(三五〇―四〇九頃)が四〇二年から四〇五年に訳出したもので、東アジアにおいては、大乘の最も基本的な文献の一つになっている。(9)東南西北といった四方は絶対的なものではないので、四大洲の位置は正確には表せないとする点、(12)四天王の居所の位置は須弥山を取り囲む七つの山脈の内の最も内側の山脈とする点などを特徴的な内容とする。なお、蓮弁須弥山図は、『大智度論』に依拠するとする説もあるが、筆者には直ちにはしたが

えない。というのは、後で見るように、『大智度論』よりも符合する内容を有する仏典が存在するからである（第四章に後述）。

⑦『婆沙論（阿毘達磨大毘婆沙論）』大正二七、第一五四五（『資料集』一〇頁、三一―一三図）。原典は、カシミールに拠点を置いていた声聞乗・説一切有部主流派の教理をまとめた論書で、三世紀頃までに完成したもののらしい。梵本は伝わらない。ただし、断簡は発見されている。漢訳は、玄奘が六五六年から六五九年に訳出したものである。玄奘の訳によれば、（3）須弥山の断面は上辺が短い台形（のよう）であるという。この点は『婆沙論』の大きな特徴といえる。ただし、眞諦の『俱舍釈論』によれば、『俱舍論』に同じく正方形である可能性もあり注意が必要である。また、『俱舍論』は、（14）須弥山に八竜の存在の可能性を認めすが、一方、『婆沙論』は、八竜については記さず、二竜とする説があることをしめすのみである。

⑧『順正理論（阿毘達磨順正理論）』大正二九、第一五六二（『資料集』一〇頁、三一―一四図）。原典は、衆賢（五世紀後半頃）が『俱舍論』の内容を批判し正義を表明するために記した声聞乗・説一切有部主流派の論書である。梵本は伝わらない。漢訳は、玄奘が六五三年から六五四年に訳出したものである。『婆沙論』とほぼ同じ内容を有するが、『俱舍論』の（14）八竜を否定していない。また、（16）八寒地獄（八寒奈落迦）については、『俱舍論』は、閻浮提の下の大八地獄（八熱地獄）の傍らにあるとするが、『順正理論』は、輪圍山（鐵輪圍山）の外（すな

わち須弥山世界の外）にあるとする。なお、この八寒地獄の位置についての『順正理論』の説は、日本の空海（七七四―八三五）の『十住心論』に採用されている。

⑨『立世論（仏説立世阿毘曇論）』大正三二、第一六四四（『資料集』一一頁、三一―一五図）。原典は、声聞乗・正量部によるもので、遅くとも二世紀には成立していたとされる。¹⁵ 梵本は伝わらない。漢訳は、眞諦が五五九年あるいは五五八年に訳出したものである。『俱舍論』がしめすところとは、（4）須弥山山頂の四つの峰の位置、（5）四層の張り出しの高度、（9）四大州の形、（10）中洲の数、（11）帝釈天の善法堂の位置、（12）四天王の居所の位置、（16）地獄の位置など異なる内容を多く有する。

⑩『正法念処經』大正一七、第七二二（『資料集』一二頁、三一―一八図）。原典は、声聞乗に属すとされるが、部派などの詳細は不明である。¹⁶ 梵本は伝わらない。漢訳は、北魏の般若流支（六世紀前半頃）が五三九年に訳出したものといわれる。地獄について詳しい内容を有す。日本の源信（九四二―一〇一七）が『往生要集』に引用していることで知られる。（6）須弥山は六万の山々に囲まれているとする点、（9）四大洲の位置と形などに大きな特徴がある。

小稿では以上にあげた仏典を蓮弁須弥山図との比較分析に用いるが、『梵網經』大正二四、第一四八四についても、ここで若干述べておきた

い。というのは、『梵網經』は、蓮弁須弥山図を含めて東大寺大仏の意匠を総合的に検討する上では、極めて重要な仏典の一つと思われるからである。¹⁷望月信亨氏の研究をはじめとする近年の研究により、『梵網經』は中国で撰述された偽經であることがほぼ明らかになっている。¹⁸船山徹氏は、『梵網經』上下二巻は下巻が先に成立したとする望月氏の説を發展させ、上巻成立の下限は五九四年、下巻成立はおよそ四五二年から後三十年ほどの間であろうという。¹⁹『梵網經』は、須弥山世界についてはとくに詳しい内容を有しない。したがって、小稿における比較分析には用いないが、蓮弁須弥山図の閻浮提に釈迦が坐す点は、あるいは『梵網經』に依拠するものであるようにも思われる(図3)。²⁰ただし、『俱舍論』にもよる可能性がある。²¹

第二章、諸説を集めた仏典

ここでは、須弥山世界に関する諸説を概観する上で有用な仏典として、次を紹介しておきたい。

①『経律異相』大正五三、第二二二。梁の宝唱(五世紀後半から六世紀頃)らが五一六年に編纂した仏教事典のようなものである。成立の時代が早い、真諦による『立世論』や『俱舍釈論』以降の情報は含まれていないが、当時までの代表的な情報が収集されており参考になる。

②『法苑珠林』大正五三、第二二二。唐の道世(七世紀頃)が六六八

年に編纂した仏教事典のようなもので、真諦や玄奘による漢訳仏典などからも情報が抽出されており有用である。

③『凡聖界地章』。唐の良賁(七一七―七七七)が七六三年から七六五年までの間に撰述したもので、いずれの大藏經にも収載されておらず、中国では散逸し伝わらない。²²一方、日本では空海が将来し後に写本および版本が作られ今日まで伝わっている。その内容は、良賁の独断であるようにも思われるが、とりあえず体系的に情報の取捨選択が行われており理解しやすい。須弥山本体については、基本的には『俱舍論』の説を採用しているが、八寒地獄の位置については、『順正理論』の説をとるのが特徴的である。『凡聖界地章』は、その宇宙論が空海の『十住心論』に取り入れられており、見落としてはならない重要な文献である。²³

④『十住心論(秘密曼荼羅十住心論)』大正七七、第二四二五(『資料集』九頁、三一―一四)。空海が八三〇年頃に撰述したもので、真言宗が他宗よりも高く位置づけられることを主張した論書である。²⁴そこに記された宇宙論は、空海の公式見解といえるものであり、注目に値しよう。なお、須弥山世界については、『凡聖界地章』の内容をそのまま引用している。

第三章、須弥山世界に関する諸説の概要と 蓮弁須弥山図の内容

ここでは、須弥山世界を図像学的に考察する上で注目すべき点として、それぞれの仏典には如何なる内容が説かれているか、その概要を述べる。そして、蓮弁須弥山図の内容との対応関係を分析する。蓮弁須弥山図は、本来、大仏が坐す台座に取り付けられたそれぞれの蓮弁に基本的には大弁には七つずつ小弁には四つあるいは三つずつ描かれていたらしいが、すべてが今日に伝わっているわけではない。また、内容を異にする例もあるが、図3は最も典型的な例の一つと見てよさそうであるから、小稿ではこれを用いる。なお、以下では丸数字の上に、仏典の内容が蓮弁須弥山図の内容に符合する（依拠されたと思しう）と思われる場合は○、符合しないとは必ずしもいえないと考えられる場合は△、符合しない（依拠されていないといえる）と判断される場合は×印を付すことにする。ただし、判定の基準が不明瞭になってしまうところもないわけではない。したがって、今回の判定はあくまで現段階におけるもので、今後修正が必要になるところもあろう。

（1）須弥山の高度

八万由旬とする説と、八万四千由旬とする説の二説がある。なお、由旬（踰繕那）については、定説はない。たとえば、玄奘の『大唐西域記』には、一由旬は十六里（唐の大尺でなら約八・五キロ）とする説などが見られる。²⁵

- ① 『俱舍論』は八万由旬。
- ② 『世記経』は八万四千由旬。
- ③ 『起世経』は八万四千由旬。
- ④ 『華嚴経』では、『六十華嚴』は高度をしめさないが、『八十華嚴』は八万四千由旬であることをしめす。『六十華嚴』の注である唐の法蔵（六四三―七一二）の『探玄記（華嚴経探玄記）』大正三五、第一七三三は八万四千由旬と明記する。

- ⑤ 『瑜伽論』は八万由旬。
- ⑥ 『大智度論』は八万四千由旬。
- ⑦ 『婆沙論』は八万由旬。
- ⑧ 『順正理論』は八万由旬。
- ⑨ 『立世論』は八万由旬。
- ⑩ 『正法念处経』は八万四千由旬。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、須弥山が高く聳えているのは、高度が八万由旬あるいは八万四千由旬あることをしめすものであろう。ただし、八万由旬と八万四千由旬を描き分けることはできないであろう。したがって、いずれの仏典も八万由旬あるいは八万四千由旬とするので、以上のように判定することができよう。

（2）須弥山の平面

須弥山は上から見ると、正方形であるらしい。

- ① 『俱舍論』は正方形。
- ② 『世記経』は正方形らしい。²⁶

○③『起世經』は正方形らしい。

○④『華嚴經』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』もしめさないが、『探玄記』は正方形らしいことをしめす。

○⑤『瑜伽論』は正方形らしい。

○⑥『大智度論』は正方形らしい。

○⑦『婆沙論』は正方形。²⁷

○⑧『順正理論』は正方形。²⁸

○⑨『立世論』は正方形。

○⑩『正法念處經』は正方形らしい。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、須弥山の側面に走る筋目からの判断であるが、正方形であるのをデフォルメしたものと見ることもできよう。そうであれば、いずれの仏典も正方形あるいは正方形らしいことをしめすので、以上のように判定することができよう。

もし正方形ではないとすれば、次のようになり、またとくに直接的に依拠したと見なしうる仏典は他にも知られないので、正方形を本にデフォルメしたものと見てよいであろう。①『俱舍論』は×。正方形とするから。②『世記經』は△。③『起世經』は△。④『華嚴經』は△。⑤『瑜伽論』は△。⑥『大智度論』は△。⑦『婆沙論』は×。正方形とするから。⑧『順正理論』は×。正方形とするから。⑨『立世論』は×。正方形とするから。⑩『正法念處經』は△。

(3) 須弥山の断面 (『資料集』一四頁、三一二図)

須弥山は横から見ると、正方形、鼓形(中腰細)、上辺が短い台形(上

狭下広)、上辺が長い台形(上広下狭)であるとする四説がある。

○①『俱舍論』は正方形あるいは鼓形。ただし、鼓形は、唐の普光(七世紀頃)の『俱舍論記』大正四一、第一八二一および同じく法宝(七世紀から八世紀初め)の『俱舍論疏』大正四一、第一八二二によるもので、玄奘訳『俱舍論』が必ずしも明確にしめすものではない。

△②『世記經』はしめさず。他の阿含經典の内容と比較するに、正方形あるいは上辺が長い台形かとも思われるが、正確なところは不明。

×③『起世經』は上辺が長い台形。

△④『華嚴經』では、『六十華嚴』はしめさないが、『八十華嚴』はあるいは蓮華の場合もあるらしいことをしめす。²⁹『探玄記』はしめさない。したがって、様々な可能性が考えられる。

△⑤『瑜伽論』はしめさず。

△⑥『大智度論』はしめさず。

×⑦『婆沙論』は上辺が短い台形。玄奘の訳によれば、上辺は二万由旬で、下辺は八万由旬という。これが正しければ、この点は説一切有部主流派の特徴的な考え方といえる。ただし、眞諦の『俱舍釈論』によれば、上辺も下辺も八万由旬で、山頂の中央にある最もすぐれた処の一辺が二万由旬である可能性があり、さらに検討が必要である。

×⑧『順正理論』は上辺が短い台形。

○⑨『立世論』は正方形。³⁰

△⑩『正法念處經』はしめさず。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、須弥山の断面は、正方形であることをデフォルメしたものと見ることもできよう。そうであれば、以上のように判定することができよう。

もし図がしめすとおりであり、正方形ではないとすれば、次のようになり、またとくに直接的に依拠したと見なしうる仏典は他にも知られないので、正方形を本にデフォルメしたものと見てよいであろう。①『俱舍論』は×。正方形あるいは鼓形とするから。②『世記経』は△。③『起世経』は×。上辺が長い台形とするから。④『華嚴経』は△。⑤『瑜伽論』は△。⑥『大智度論』は△。⑦『婆沙論』は×。上辺が短い台形とするから。⑧『順正理論』は×。上辺が短い台形とするから。⑨『立世論』は×。正方形とするから。⑩『正法念处经』は△。

(4) 須弥山山頂の四つの峰の位置〔資料集〕一四頁、三三三図

四つの峰が山頂の四隅にあるとする説と、帝釈天の善見城の四面（東南西北）に対する位置（山頂の四辺）にあるとする説の二説がある。なお、華嚴宗が依拠する仏典（『探玄記』）は、『俱舍論』および法相宗が依拠する仏典（『瑜伽論』）と図像学的に見て異なる内容をしめしているようであり、注意が必要であろう。

○①『俱舍論』は四隅。

△②『世記経』はしめさず。

○③『起世経』は四面らしい。

○④『華嚴経』では、『六十華嚴』はしめさず。『八十華嚴』は四つの峰の存在をしめすが、位置はしめさず。一方、『探玄記』は正確には

四面にそれぞれ八つの丘があるとする。

○⑤『瑜伽論』は四隅。

△⑥『大智度論』はしめさず。

○⑦『婆沙論』は四隅。

○⑧『順正理論』は四隅。

○⑨『立世論』は四面。

△⑩『正法念处经』はしめさず。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、四つの峰のうち一つは向こうにあり見えないのであろう。そして、四つの峰の位置は、あるいは四面であるようにも見え、四面あるいは四隅のどちらであるのか必ずしもよくわからない。したがって、とりあえず以上のように判定することができよう。

もし四面であると言い切れれば、次のように判定できよう。①『俱舍論』は×。四隅とするから。②『世記経』は△。③『起世経』は○。④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も△。四つの峰が四面それぞれにある八つの丘を表したのなら、『探玄記』は○。⑤『瑜伽論』は×。四隅とするから。⑥『大智度論』は△。⑦『婆沙論』は×。四隅とするから。⑧『順正理論』は×。四隅とするから。⑨『立世論』は○。⑩『正法念处经』は△。以上のように、四面であれば、華嚴宗が依拠する『探玄記』に符合するとも見なしうるが、それでは『俱舍論』および法相宗が依拠する『瑜伽論』の内容と齟齬をきたすことになる。あるいは、この齟齬を避けるために、蓮弁須弥山図においては、四面か四隅か曖昧に描かれているのかもしれない。なお、華嚴宗の解釈と法相宗

の解釈により、図像学的に明らかな相違が生じそうなところとして、この点と(12)四天王の居所の位置の二点があげられよう。一方、『俱舎論』については、この点のみのである。

(5) 須弥山の側面の張り出し(『資料集』一四頁、三一―二四)

三層あるいは四層の張り出しがあるとする説がある。

- ①『俱舎論』は四層。下から第四層目は須弥山の中腹にある。第一層目から第四層目までの高度は、それぞれ海拔一万由旬、二万由旬、三万由旬、四万由旬。

- ②『世記経』は四層らしい。第四層目は須弥山の中腹にあるらしい。他の三層の高度はしめさず。

- ×③『起世経』は三層あるいは四層。四層なら、第四層目は山頂にあるらしい。他の三層の高度はしめさず。

- △④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『探玄記』もしめさず。

- △⑤『瑜伽論』は四層。高度はしめさず。

- △⑥『大智度論』はしめさず。

- ⑦『婆沙論』は四層。第四層目は須弥山の中腹にある。第一層目から第四層目までの高度は、それぞれ海拔一万由旬、二万由旬、三万由旬、四万由旬。

- ⑧『順正理論』は四層。第四層目は須弥山の中腹にある。第一層目から第四層目までの高度は、それぞれ海拔一万由旬、二万由旬、三万由旬、四万由旬。

- ×⑨『立世論』は四層。第一層目から第四層目までの高度は、それぞれ五十由旬、二万由旬、四万由旬、六万由旬。とくに第四層目は須弥山の四分の三の高さに当たる。

- △⑩『正法念处经』はしめさず。³²

一方、蓮弁須弥山図を見るに、四層の張り出しがあり、下から第四層目は須弥山のほぼ中腹に当たる。したがって、以上のように判定することができよう。

(6) 須弥山を取り囲む山脈の数

四大洲より内に七山とする説や八山とする説がある。内に八山とするのは、『世記経』と『起世経』に特徴的な内容である。須弥山は六万山に囲まれるとする説もある。

- ①『俱舎論』は内に七山。³³

- ×②『世記経』は内に八山。

- ×③『起世経』は内に八山。

- △④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『探玄記』もあるいは内に七山らしいことをしめすが、正確なところは後考にゆだねたい。³⁴

- ⑤『瑜伽論』は内に七山。

- △⑥『大智度論』は須弥山はあるいは九山あるいは十山に囲まれるとするが、正確なところは不明。

- ⑦『婆沙論』は内に七山。

- ⑧『順正理論』は内に七山。

○⑨『立世論』は内に七山。

△⑩『正法念処経』は須弥山は六万山に囲まれるとする。これは『正法念処経』に特徴的な内容である。ただし、内か外かは不明。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、四大洲より内に七つの山脈がある。したがって、以上のように判定することができよう。

(7) 大鐵圍山(大金剛山)の存在

大鐵圍山の存在をしめす仏典と、しめさない仏典がある。しめす場合もその位置に違いが見られる。とくに『世記経』と『起世経』は特徴的な内容をしめす。

△①『俱舍論』はしめさず。なお、四大洲の外側に鐵輪圍山がある。

×②『世記経』は四大洲の内側に金剛輪山(金剛圍山)があり、外側に大金剛輪山(大金剛山)があるとする。したがって、大金剛輪山は須弥山世界の内にある。

×③『起世経』は四大洲の内側に斫迦羅山(輪圍、鐵圍山)があり、外側に大輪圍山(大鐵圍山)があるとする。したがって、大輪圍山は須弥山世界の内にある。

○④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も四大洲の外側に金剛圍山(鐵圍山)があり、さらにその外側(したがって須弥山世界の外)に大金剛圍山(大鐵圍山)があるとするらしい。『探玄記』はしめさず。

△⑤『瑜伽論』はしめさず。

△⑥『大智度論』はしめさず。

△⑦『婆沙論』はしめさず。なお、四大洲の外側に輪圍山がある。

△⑧『順正理論』はしめさず。なお、四大洲の外側に鐵輪圍山がある。

△⑨『立世論』はしめさず。なお、四大洲の外側に鐵圍山がある。

△⑩『正法念処経』は存在をしめし、輪山および大輪山があるとする。ただし、その位置はしめさず。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、四大洲より外側に須弥山世界を取り囲む鐵圍山に相当する山脈があり、さらにその外側(すなわち須弥山世界の外)に大鐵圍山に相当する山脈がある(図2、蓮弁の内左右)。したがって、以上のように判定することができよう。

(8) 須弥山を取り囲む山脈の様態(『資料集』一五頁、三一五図)³⁵

山脈は同心方形とする説と、同心円形(環形)の可能性をしめす説の二説がある。後者は、『世記経』と『起世経』に特徴的な内容である。

○①『俱舍論』は四大洲の内側はすべて同心方形で、外側の鐵輪圍山は円形。

○②『世記経』は同心方形あるいは同心円形。ただし、山脈の名称から判断するに、四大洲のすぐ内側と外側は円形。(7)を参照。

○③『起世経』は同心方形あるいは同心円形。ただし、山脈の名称から判断するに、四大洲のすぐ内側と外側は円形。(7)を参照。

△④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も『探玄記』もしめさず。

△⑤『瑜伽論』はしめさず。

△⑥『大智度論』はしめさず。

○⑦『婆沙論』は四大州の内側はすべて同心方形らしく、外側の輪圍山は円形。

○⑧『順正理論』は四大州の内側はすべて同心方形で、外側の鐵輪圍山は円形。

○⑨『立世論』は四大州の内側はすべて同心方形で、外側の鐵輪圍山は円形。

△⑩『正法念処經』はしめさず。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、同心方形のようでもあるが、正確なところはわからない。したがって、以上のように判定することができよう。

もし四大洲の内側がすべて同心方形であれば、次のようになる。①『俱舍論』は○。②『世記經』は×。四大洲の内側に金剛輪山があるとするから。③『起世經』は×。四大洲の内側に輪圍山があるとするから。④『華嚴經』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も『探玄記』も△。⑤『瑜伽論』は△。⑥『大智度論』は△。⑦『婆沙論』は○。⑧『順正理論』は○。⑨『立世論』は○。⑩『正法念処經』は△。

(9) 四大洲の位置と形 (『資料集』一五頁、三一五図)

須弥山の東と西に位置する大洲は、仏典により形を異にする。とくに『正法念処經』は大いに異なる説をしめす。

○①『俱舍論』は東には西半分が欠けた半円形の勝身洲(毘提訶洲)、南には北辺が長く南辺が短い台形の瞻部洲、西には円形の牛貨洲(瞿陀尼洲)、北には正方形の俱盧洲。そして、それぞれの大陸の人

の顔はそれぞれの大陸と形が同じであるとする。

×②『世記經』は東には円形の弗于逮、南には北辺が長く南辺が短い台形の閼浮提、西には半円形の俱耶尼、北には正方形の鬱单越。

×③『起世經』は東には円形の弗婆提、南には北辺が長く南辺が短い台形の閼浮提、西には半円形の瞿陀尼、北には正方形の鬱单越。

△④『華嚴經』では、『六十華嚴』はしめさず。『八十華嚴』は東には弗婆提、南には閼浮提、西には拘耶尼、北には鬱单越があるとするが、形はしめさず。『探玄記』はしめさず。

○⑤『瑜伽論』は東には半円形の毘提訶洲、南には車箱(台形か)のような形の瞻部洲、西には円形の瞿陀尼洲、北には正方形の俱盧洲。

△⑥『大智度論』は、右回りに弗婆提、閼浮提、瞿陀尼、鬱单越があるとするも、絶対的な方位を定めることは不可能なので、位置を正確に表すことはできないとする。形もしめさず。

△⑦『婆沙論』は、東には毘提訶洲、南には瞻部洲、西には瞿陀尼洲、北には俱盧洲(俱盧洲)があるとするが、形はしめさず。そして、毘提訶洲の人の顔は半円形、瞻部洲の人の顔は車箱(台形か)、瞿陀尼洲の人の顔は円形、俱盧洲の人の顔は正方形とする。

○⑧『順正理論』は東には西半分が欠けた半円形の勝身洲、南には北辺が長く南辺が短い台形の瞻部洲、西には円形の牛貨洲、北には正方形の俱盧洲。そして、それぞれの人の顔はそれぞれの大陸と形が同じであるとする。

×⑨『立世論』は東には円形の弗毘提、南には北辺が長く南辺が短い台形の剌浮提、西には円形の瞿耶尼、北には正方形の鬱单越。

×⑩『正法念処經』は北東には円形の瞿陀尼、南東には半円形の弗婆提、南西には台形の閻浮提、北西には正方形の鬱單越。『正法念処經』のこの内容は他の仏典の内容と大いに異なるものである。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、蓮弁須弥山図には内容の異なる例もあるが、図3によるならば、東は西半分が欠けた半円形、南は北辺が長く南辺が短い台形、西は円形、北は正方形と見てよいであろう。もしそうであれば、以上のように判定することができよう。

(10) 中洲と小洲の存在

中洲あるいは小洲の存在をしめす仏典がある。

△①『俱舍論』は四大洲にはそれぞれ二つの中洲が付属するとする。小洲はしめさず。

△②『世記經』はしめさず。

△③『起世經』は中洲はしめさないが、八万あるいは八万四千の小洲があるとする。

△④『華嚴經』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も中洲はしめさないが、八億の小洲があるとする。³⁷『探玄記』はしめさず。

△⑤『瑜伽論』は四大洲にはそれぞれ二つの中洲が付属するとする。小洲はしめさず。

△⑥『大智度論』は中洲はしめさないが、閻浮提は五百の小洲に取り囲まれているとする。

△⑦『婆沙論』は四大洲にはそれぞれ二つの中洲が付属し、さらに、それぞれの中洲には五百の小洲が付属するとする。

△⑧『順正理論』は四大洲にはそれぞれ二つの中洲が付属するとする。小洲はしめさず。

×⑨『立世論』は四大洲の間にそれぞれ一つの中洲があり、したがって、四つの大洲と四つの中洲があり、これら八つはそれぞれ八つの小洲に取り囲まれているとする。

△⑩『正法念処經』は南西の閻浮提は五百の小洲に、南東の弗婆提は多くの小洲に取り囲まれているとする。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、四大洲のそれぞれには二つの中洲が付属し、それぞれの中洲には二つの小洲が付属する。この点に正確に符合するものは一つもない。したがって、以上のように判定することができよう。あるいはこの点は蓮弁須弥山図の原案作成者あるいは画工の創意工夫によるものではなからうか。

なお、大洲には二つの中洲と多くの小洲が付属するということであれば、次のようになる。①『俱舍論』は△。②『世記經』は△。③『起世經』は△。④『華嚴經』は△。⑤『瑜伽論』は△。⑥『大智度論』は△。⑦『婆沙論』は○。⑧『順正理論』は△。⑨『立世論』は×。合わせて四つの大洲と四つの中洲とするから。⑩『正法念処經』は△。

(11) 帝釈天の善法堂の位置 (『資料集』一五頁、三一四図)

須弥山の山頂には帝釈天の宮(あるいは城)があり、その外あるいは内に善法堂があるという。善法堂の位置は声聞乗の部派によって説が異なるらしい。

○①『俱舍論』は帝釈天の善見宮が須弥山山頂の中央にあり、善法堂が

その外南西にあるとする。なお、『俱舎釈論』は「宮」を「城」と表記する。³⁸ここに見られる「宮」と「城」は、それぞれの漢訳の時代における漢字の用法の違いをしめすものとして、都城制度などを考察する時に注意すべき点となる。

○②『世記経』は善見城が山頂にあり、善法堂がその城内にあるとする。

○③『起世経』は善見城が山頂にあり、善法堂がその城内にあるとする。

○④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も善見大城および善法堂が山頂にあるとする。『探玄記』は帝釈天の宮が山頂の中央にあるとする。

○⑤『瑜伽論』は帝釈天の宮が山頂の中央にあり、その内北東あるいは外北東に善法とよばれる集会処があるとする。

○⑥『大智度論』は善見城および善法堂が山頂にあるとする。

○⑦『婆沙論』は善見城が山頂の中央にあり、大善法堂がその外南西にあるとする。

○⑧『順正理論』は善見宮が山頂の中央にあり、大善法堂がその外南西にあるとする。

○⑨『立世論』は善見大城が山頂の中央にあり、善法堂がその外北西にあるとする。

○⑩『正法念处经』は善見城が山頂にあり、善法堂がその城内にあるとする。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、須弥山山頂に帝釈天の建物が描かれて

いるようであるが、よくわからない。したがって、いずれの仏典の内容にも符合しているとは見ることもできよう。それゆえ、以上のように判定することができよう。

(12) 四天王の居所の位置

四天王の居所の位置は、須弥山中腹とする説と、須弥山を取り囲む山脈の内の最も内側の山脈とする説の二説がある。

○①『俱舎論』は須弥山中腹の張り出し。

○②『世記経』は須弥山中腹の張り出し付近らしい。

○③『起世経』は須弥山中腹にある由乾陀山の山頂。

○④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』もしめさず。『探玄記』は須弥山中腹。

○⑤『瑜伽論』は須弥山を取り囲む山脈の内の最も内側の山脈である持雙山。

○⑥『大智度論』は須弥山を取り囲む山脈の内の最も内側の山脈である由健陀羅山（遊乾陀山）。なお、由健陀羅山は九宝山のひとつとされ、その高度は四万二千由旬というから、最も内側の山脈であろうと考えられる。³⁹

○⑦『婆沙論』はしめさず。⁴⁰ただし、四天王衆天は須弥山の四つの層、須弥山を取り囲む七つの山脈、太陽、月、星の中に住すとする。

○⑧『順正理論』は須弥山中腹の張り出し。

○⑨『立世論』は須弥山を取り囲む山脈の内の最も内側の山脈である由乾陀山。

○⑩『正法念処經』は須弥山の山中。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、第四層目に四天王の居所が描かれているようにも見えるが、四天王の居所を第四層目としない仏典の立場から見れば、四天王の居所の位置が意識され描かれているかどうかよくわからない。したがって、いずれの仏典の内容にも符合していると見ることもできよう。それゆえ、以上のように判定することができよう。

なお、もし四天王の居所の位置を明らかに描いたら、華嚴宗が依拠する『探玄記』と法相宗が依拠する『瑜伽論』のどちらかと齟齬をきたしてしまうことになる。あるいは、この齟齬を避けるために、曖昧に描かれているのかもしれない（４）須弥山山頂の四つの峰の位置を参照）。

(13) 無熱惱池（阿耨達池）の四つの獣口の配置（『資料集』一五頁、三

一六図

閻浮提にある無熱惱池の四つの獣口からそれぞれ一つの大河が流れ出すが、その獣口の東南西北の配置については、東は象からとする説と、東は牛からとする説の二説がある。なお、玄奘および空海は、東は牛とするものの、さらに異なる説をとる。⁴¹

△①『俱舍論』はしめさず。なお、無熱惱池は閻浮提の中央より北にあるとする。

×②『世記經』は東は牛、南は獅子、西は馬、北は象とする。

○③『起世經』は東は象、南は牛、西は馬、北は獅子とする。

○④『華嚴經』では、『六十華嚴』はしめさず。『八十華嚴』は、大河の名称と位置から判断するに、東は象、南は牛、西は馬、北は獅子ら

しい。『探玄記』は東は象、南は牛、西は馬、北は獅子と明記する。

△⑤『瑜伽論』はしめさず。

○⑥『大智度論』は東は象、南は牛、西は馬、北は獅子とする。

○⑦『婆沙論』は東は象、南は牛、西は馬、北は獅子とする。なお、無熱惱池は閻浮提の中（あるいは中央）にあるとする。

△⑧『順正理論』はしめさず。なお、無熱惱池は中印度より北にあるとする。

△⑨『立世論』はしめさず。

△⑩『正法念処經』はしめさず。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、南西北の獣口はよくわからないが、東は明らかに象である。西も象のように見えないことはないが、四方の内に象が二カ所あるとする仏典はしられないので、西は少なくとも本来的には象ではないであろう。小稿で取り上げる仏典の内容から判断するに、図の原案では東は象、南は牛、西は馬、北は獅子であったように思われる。したがって、以上のように判定することができよう。

(14) 須弥山の麓に竜⁴²

須弥山の麓に時に二竜が巻き付くとする説と、八竜が大地を支えるとする説の二説がある。

○①『俱舍論』は八竜が大地を支えうとする。ただし、麓と明記しているわけではない。

△②『世記經』は時に二竜が巻き付く。

△③『起世經』は時に二竜が巻き付く。

△④『華嚴經』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も『探玄記』もしめさず。

○⑤『瑜伽論』は八竜が大地を支えるとする。ただし、麓と明記しているわけではなく、また、竜宮は七山の間の海中にあるとする。

×⑥『大智度論』は二竜が巻き付くとする説を引く。

△⑦『婆沙論』は時に二竜が巻き付くとする説があるとする。

○⑧『順正理論』は八竜が大地を支えうとする。ただし、麓と明記しているわけではない。

△⑨『立世論』はしめさず。

△⑩『正法念処經』はしめさず。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、水際に九竜が描かれている。小稿で取り上げる仏典の内で、この点に正確に符合するものはないが、もし八竜であれば、以上のように判定することができよう。なお、九竜は、あるいは『瑜伽論』にいう「八大竜」についての解釈に関連するものかもしれない。⁴³ また、時に二竜が巻き付くとする説の二竜の存在を重く見るのであれば、次のように『世記經』と『起世經』は×となろう。①『俱舍論』は○。②『世記經』は×。時に二竜が巻き付くとするから。③『起世經』は×。時に二竜が巻き付くとするから。④『華嚴經』は△。⑤『瑜伽論』は○。⑥『大智度論』は×。二竜が巻き付くとする説を引くから。⑦『婆沙論』は△。時に二竜が巻き付くとする説があることをしめすが、その説を必ずしも重視してはいないとも解釈されるから。⑧『順正理論』は○。⑨『立世論』は△。⑩『正法念処經』は△。

(15) 日月の位置

太陽と月は、閻浮提の上空を通り、その高度は須弥山の半分らしい。ただし、『華嚴經』は異なる説をしめす。

○①『俱舍論』は日月は閻浮提の上空を通り、高度は須弥山の半分。

○②『世記經』は日月は閻浮提の上空を通り、高度は須弥山の半分。

△③『起世經』は日は閻浮提の上空を通り、高度は須弥山の半分。月はしめさず。

○④『華嚴經』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も、日月は閻浮提の上空を通り、その高度は四万由旬とする。一方、『六十華嚴』はしめさないが、『八十華嚴』によれば、須弥山の高度は八万四千由旬である。したがって、日月の高度は須弥山の半分ではない。この点では、『華嚴經』が尺度を異にする小經典（須弥山の高度を八万由旬とする系統と八万四千由旬とする系統）の内容を採用したことをしめすものではなからうか。『探玄記』は『俱舍論』を引き月の高度は四万由旬とする。

○⑤『瑜伽論』は日月の高度は須弥山の半分。

○⑥『大智度論』は日月は閻浮提の上空を通り、高度は須弥山の半分。

△⑦『婆沙論』はしめさず。

○⑧『順正理論』は日月は閻浮提の上空を通り、高度は須弥山の半分。

○⑨『立世論』は日月は閻浮提の上空を通り、高度は須弥山の半分。

○⑩『正法念処經』は日月の高度は須弥山の半分。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、須弥山の中腹付近に太陽と月が描かれている。したがって、以上のように判定することができよう。なお、『華

厳経』は異なる説をしめすが、図像学的には大きな相違が生じるものではないであろう。

(16) 地獄の位置

八大地獄（八熱地獄、八熱奈落迦）と八寒地獄（八寒奈落迦）などの位置については、説が異なる。

○①『俱舍論』は八大地獄が閻浮提の下にあり、八寒地獄が八熱地獄の傍らにあるとする。

○②『世記経』は八大地獄および十地獄が大金剛山の外（すなわち須弥山世界の外）にあるとする。

○③『起世経』は八大地獄および十地獄が大鐵圍山の外（すなわち須弥山世界の外）にあるとするらしい。

○④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』もしめさず。『探玄記』は大海の下に八大地獄があるとし、あるいは多くの小地獄が鐵圍山などにあるらしいとする。

○⑤『瑜伽論』はしめさず。

○⑥『大智度論』はしめさず。

○⑦『婆沙論』は八大地獄が閻浮提の下にあるとする。八寒地獄はしめさず。

○⑧『順正理論』は八大地獄が閻浮提の下にあり、八寒地獄が輪圍山（鐵輪圍山）の外（すなわち須弥山世界の外）にあるとする。

○⑨『立世論』は八大地獄が閻浮提の下にあり、十寒地獄が鐵輪（鐵圍山）の外（すなわち須弥山世界の外）にあるとする。

○⑩『正法念処経』は八大地獄の内の大焦熱地獄と阿鼻地獄は須弥山世界の外にあるとするらしい。その他の地獄は位置はしめさず。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、地獄は描かれていない。けれども、地獄は図においては見えない場所に位置するので、描かれていなくても問題は無いであろう。それゆえ、以上のように判定することができよう。

(17) 閻魔王の居所の位置

その位置は、閻浮提の下、八大地獄の上らしい。ただし、『起世経』は異なる説をしめす。

○①『俱舍論』は閻魔王の国が閻浮提の下にあるとする。そこは八大地獄の上らしい。

○②『世記経』は閻魔王の宮が閻浮提の南、大金剛山の内（すなわち須弥山世界の内）にあるとする。

○③『起世経』は閻魔王の宮殿が閻浮提の南、二鐵圍山（大鐵圍山）の外（すなわち須弥山世界の外）にあるとする。

○④『華嚴経』では、『六十華嚴』も『八十華嚴』も『探玄記』もしめさず。

○⑤『瑜伽論』はしめさず。

○⑥『大智度論』はしめさず。

○⑦『婆沙論』は閻魔王界が閻浮提の下にあるとする。そこは八大地獄の上らしい。

○⑧『順正理論』は閻魔王の国が閻浮提の下にあるとする。そこは八大地獄の上らしい。

○⑨『立世論』は夜摩世間地獄（おそらく閻羅王地獄）が閻浮提の下にあるとする。そこは閻魔王の居所で、八大地獄の上らしい。

○⑩『正法念処經』は餓鬼世界（おそらく閻魔王の居所）が閻浮提の下にあるとする。

一方、蓮弁須弥山図を見るに、閻魔王の居所は描かれていない。けれども、閻魔王の居所は図においては見えない場所に位置するので、描かれていなくても問題はないであろう。それゆえ、以上のように判定することができよう。

第四章、蓮弁須弥山図と諸仏典の関係

前章で分析したところをまとめると、表1のようになる。これによれば、蓮弁須弥山図と諸仏典の関係について、次のようなことがいえそうである。

蓮弁須弥山図の実際の原案作成においては、①『俱舍論』が本（もと）にされたようである。×がなく、○が最も多い点は、そのことをしめすものであろう。図は基本的（実質的）には『俱舍論』に依拠し、その内容が④『華嚴經』と齟齬をきたさない場合は、そのまま採用されたものであろう。『俱舍論』が△をしめす（7）大鐵圍山（大金剛山）の存在と（13）無熱惱池の四つの獸口の配置については、『俱舍論』にはそれらに関する内容がないので、それらについての内容を有する『華嚴經』（おそらく『六十華嚴』およびその注である『探玄記』⁴⁴）にもとづいたものであろう。（10）中洲と小洲の存在に関しては、原案作成者ある

いは画工の創意工夫かもしれない。（4）須弥山山頂の四つの峰の位置および（12）四天王の居所の位置については、『俱舍論』および『華嚴經』（正確には『探玄記』）さらには⑤『瑜伽論』と齟齬をきたさないように曖昧に描かれた可能性がある。

図は総じて『華嚴經』（『六十華嚴』および『探玄記』）に符合するようである。少なくとも符合しないことはない。×がないのは、そのことをしめすものである。図が『華嚴經』（おそらく『六十華嚴』⁴⁵）に依拠した盧舍那像である東大寺大仏の台座の蓮弁に描かれたものであることを考えると、図は原則的には『華嚴經』（おそらく『六十華嚴』）を本にし、『華嚴經』で不明なところは『探玄記』および『俱舍論』をもって援用したものということもできよう。

図は総じて『瑜伽論』にも符合するようである。⁴⁶『瑜伽論』が『俱舍論』とほぼ同様な内容を有すためであろうが、『瑜伽論』にも×がない。したがって、大乘・瑜伽行唯識派ひいては法相宗が想定していた実在論的（我々の目に見えるような）須弥山世界は、おおよそ蓮弁須弥山図のようなものであったと理解しておいてよいであろう。⁴⁷

図は声聞乗の②『世記經』によるものであるとする説があるが、その説をとるのであれば、（6）須弥山を取り囲む山脈の数、（7）大鐵圍山（大金剛山）の存在、（9）四大洲の位置と形、（13）無熱惱池の四つの獸口の配置における矛盾点を如何に解決するか説明が必要となるよう。⁴⁸

図は大乘の⑥『大智度論』によるものであるとする説があるが、その説をとるのであれば、『大智度論』よりも符合する点が多い『俱舍論』、『華嚴經』（および『探玄記』）、『瑜伽論』をとらない理由を明らかにし

ておかねばならないであろう。

図は声聞乗・説一切有部主流派の⑦『婆沙論』および同じく⑧『順正理論』ともかなり符合するといえよう。しかしながら、玄奘の訳にしたがう限り、両仏典は(3)須弥山の断面は上辺が短い台形とするので、重要な点で違うものであるように思われる。

図は③『起世經』、⑨『立世論』、⑩『正法念處經』とは特別な関係を有するものではないであろう。

おわりに

小稿では、まず第一章で、須弥山世界について詳しい内容を有する代表的な仏典を紹介した。第二章では、諸説を集めた有用な仏典に言及した。第三章では、『資料集』にもとづき諸説の概要をまとめ、それぞれの特徴を確認し、東大寺大仏蓮弁須弥山図との対応関係を分析した(表1)。そして第四章では、図と諸仏典との関係を考察した。

蓮弁須弥山図は、実質的には『俱舍論』に依拠したものと思われるが、原則的には『華嚴經』(おそらく『六十華嚴』)を本にし、『華嚴經』で不明なところは『探玄記』および『俱舍論』をもって援用したものとすることもできそうである。この点は、蓮弁に描かれた須弥山の上空に見られる諸天の図像を分析検証する時に参考となろう。また、『俱舍論』の内容が『探玄記』の内容と図像学的に見て唯一齟齬をきたす可能性がある(4)須弥山山頂の四つの峰の位置が図においては曖昧に描かれているようにも思われる。この点は、相異なる情報が存在した場合に、図

の原案作成者あるいは画工が如何に対処したかを考察する時に重要になってくるかもしれない。さらには、(4)須弥山山頂の四つの峰の位置、(12)四天王の居所の位置、(14)須弥山の麓に竜の描かれ方から判断するに、図の原案作成においては、興福寺を拠点に展開した法相宗系の考え方(『瑜伽論』)が参照された可能性もありそうである。

以上できる限り慎重に情報の分析整理を行ったつもりではあるが、重要な情報の見落としや解釈の誤りも多いであろう。不適切な点は、今後の研究において改めていきたい。

注

- 1 「小乗」という言葉を用いる研究者もあるが、小稿では次が説くところにもとづき「声聞乗」を用いる。Tôru Funayama: "Buddhist Theories of Bodhisattva Practice as Adopted by Daoists", *Cahiers d'Extreme - Asie* 20 (2017) 2013, pp. 15-33, p22. 須弥山世界に関するすべての概説書としては、次があげられよう。定方晟『インド宇宙論大全』(東京、春秋社、二〇一一年)。同『須弥山と極楽』講談社現代新書三三〇(東京、講談社、一九七三年)。須弥山世界については、2015 The Huntington Archive の次も参考に

なろう。

http://www.google.de/imgres?imgurl=http://huntingtonarchive.osu.edu/resources/images/buddhisticonography/mtMeru/04.jpg&imgrefurl=http://huntingtonarchive.osu.edu/resources/buddhisticonography.php&h=1154&w=1472&tbnid=RjUWMBE77n2uQM:&tbnh=97&tbnw=124&u sg=_CC9JA6aILjS5jclKGPISSGQMS8=&docid=SrtAJ2LILJjYM

- 2 『佛地經論』(卷一) 大正二六、二九三下—二九四上「如是淨土。為與三界。同一處所。為各別耶。有義各別。有處說在。淨居天上。有處說在。西方等故。有義同處。淨土周圍。無有邊際。遍法界故。如實義者。實受用土。周遍法界。無處不有。不可說言。離三界處。亦不可說。即三界處。若隨菩薩所宜現者。或在色界。淨居天上。或西方等。處所不定。」
- 3 蓮弁須彌山図は、次によれば、七五六年から七五七年頃に描かれたと考えられている。奥村秀雄「東大寺大仏蓮弁毛彫図の研究」(『東京国立博物館紀要』一二、一九七七年)、一六一—二三五頁、二一〇—二二四頁。
- 4 Angela Falco Howard: *The Imagery of the Cosmological Buddha*. Leiden: E.J. Brill, 1986, pp.65-70, p.117, p.119.
- 5 筆者は、以上の漢訳仏典から、須彌山世界に関して図像学的に重要と思われる情報を抽出整理し公開しているので、必要な場合は、次(以下『資料集』と呼ぶ)を参照。小稿においては、漢訳仏典の配列を改めるが、項目の配列(番号)はそれに準拠する。ただし、内容に補正を試みるので、齟齬が生じていると思われる場合は、小稿の内容の方を優先してほしい。
Ataru Sotomura: *Mt. Sumeru 須彌山: Source Manual for Iconographic Research on the Buddhist Universe*. Singapore. Nalanda-Sriwijaya Centre, September 2011, [Working Paper Series No.6]
http://www.iseas.edu.sg/images/pdf/nsc_working_paper_series_6.pdf
- 6 次を参照。小野玄妙(編)『佛書解説大辭典』(東京、大東出版社、一九六四—一九八八年)。鎌田茂雄ほか(編)『大藏經全解説大事典』(東京、雄山閣出版、一九九八年)。
- 7 『阿毘達磨俱舍論』(卷一一) 大正二九、五九下「頌曰。妙高頂八萬。三十三天居。…論曰。三十三天。住迷盧頂。其頂四面。各八十千。與下四邊。其量無別。有餘師說。周八十千。別說四邊。各唯二萬。」一方、『阿毘達磨俱舍釋論』(卷八) 大正二九、二一七上「偈曰。三十三住頂。縱廣二十千。釋曰。於須彌婁山上。帝釋及三十三天住此最勝處。此處縱廣云何。有餘師說。一一邊各八萬由旬。如下際。此名最勝處。有餘師說。於須彌婁頂中央。一一邊各二萬由旬。周圍八萬由旬為最勝處。三十三天於其中住。」以上は、偈頌の内容にも違いが見られる。検討が必要であろう。
- 8 岡野潔「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」(『中央學術研究所紀要』二七、一九九八年)、五五—九二頁、七五頁。
- 9 Howard: *The Imagery of the Cosmological Buddha*. p.65-70, p.117, p.119.
- 10 Howard: *The Imagery of the Cosmological Buddha*. p.94, p.113. 次を参照。
李静傑「北齊く隋の盧舍那法界仏像の図像解釈」(『仏教芸術』二五一、毎日新聞社、二〇〇〇年)、一三一—四七頁。
- 11 次に詳しい。丁明夷・馬世長「キジル石窟の仏伝壁画」(『中国石窟キジル石窟』三、東京、平凡社、一九八五年)、一七〇—二二七頁、二二三—二二六頁。
- 12 梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』梶山雄一著作集第三卷(吹田隆道編、東京、春秋社、二〇一二年)、九三頁、一一九—一二〇頁、一二七頁、一二一〇頁。
- 13 拙稿『華嚴経』の宇宙論と東大寺大仏の意匠について(『日本研究』五一、二〇一五年)、二二—四〇頁。
- 14 松本伸之「東大寺大仏蓮弁線刻画の図様について」(『南都佛教』五五、一九八六年)、五二—七〇頁。

- 15 前掲註8) 岡野潔論文、七五頁。
- 16 山邊習學「正法念處經解題」『國譯一切經』經集部八(東京、大東出版社、一九三九年)、一一七頁。
- 17 前掲註13) 拙稿、二〇一五年。および次を参照。拙稿「東大寺大仏蓮弁毛彫図について」(『南都佛教』九九、二〇一四年)、八八―一一六頁。
- 18 望月信亨『佛教經典成立史論』(法藏館、一九四六年)、四四―一四七一頁。大野法道『大乘戒經の研究』(理想社、一九五四年)、二五二―二八七頁。
- 19 船山徹「梵網經下卷先行説の再検討」(『三教交渉論叢編』、京都大学人文科学研究所、二〇一一年) 一二七―一五六頁、一五五頁。
- 20 『梵網經』(卷二) 大正二四、一〇〇三下―一〇〇四上「一花百億國。一國一釋迦。各坐菩提樹。」『梵網經』(卷二) 大正二四、一〇〇三下「復從天王宮下至閻浮提菩提樹下。爲此地上一切眾生凡夫癡闇之人。説我本盧舍那佛心中初發心中常所誦一戒光明金剛寶戒。」『梵網經』(卷二) 大正二四、九九七下「百億四天下。百億南閻浮提。百億菩薩釋迦。坐百億菩提樹下。」
- 21 『阿毘達磨俱舍論』(卷一一) 大正二九、五七下―五八上「論曰。∴南瞻部洲。∴。唯此洲中有金剛座。上窮地際下據金輪。一切菩薩將登正覺。皆坐此座上起金剛喻定。」
- 22 大正大学綜合佛教研究所凡聖界地章翻刻研究会(編著)『《良貴撰》凡聖界地章』大正大学綜合佛教研究所研究叢書第一四卷(東京、ノンブル、二〇〇六年)。
- 23 筆者は『資料集』の編集時、『凡聖界地章』の存在を知らなかった。したがって、言及していない。藤井淳氏からの知見提供に感謝申し上げます。
- 24 藤井淳『空海の思想的展開の研究』(東京、トランスビュー、二〇〇八年)。
- 25 『大唐西域記』(卷二) 大正五一、八七五下「夫數量之稱。謂踰繕那(舊曰由旬。又曰踰闍那。又曰由延。皆訛略也)。踰繕那者。自古聖王一日軍行也。舊傳。一踰繕那。四十里矣。印度國俗。乃三十里。聖教所載。唯十六里。窮微之數。分一踰繕那。為八拘盧舍。拘盧舍者。謂大牛鳴。聲所極聞。稱拘盧舍。分一拘盧舍為五百弓。分一弓為四肘。分一肘為二十四指。∴『阿毘達磨大毘婆沙論』(卷一三六) 大正二七、七〇二上「二十四指節成一肘。四肘為一弓。去村五百弓。名阿練若處。從此已去。名邊遠處。則五百弓。成摩揭陀國一俱盧舍。成北方半俱盧舍。所以者何。摩揭陀國。其地平正。去村雖近。而不聞聲。北方高下。遠猶聲及。是故北方。俱盧舍大。八俱盧舍。成一踰繕那。瞻部洲人。身長三肘半。或有過者。」次を参照。塚本善隆(編代表)『望月佛教大辭典』五(世界聖典刊行協會、一九六三年)、四九二六頁、「由旬」。
- 26 『資料集』四四頁、四一六―一六によれば、金剛圍山(金剛輪山)は「縱廣三百由旬」という。山脈の名称から判断するに、これは「縱廣」が必ずしも正方形ではないことをしめすものであろう。したがって、四三頁、四一六―二の「縱廣八萬四千由旬」は直ちには正方形であるとはいえないようにも思われる。
- 27 『資料集』二八頁、四一三―一四の apparently を削除。ただし、すべての高度において正方形であるかどうかは不明である。
- 28 『資料集』三三頁、四一四―一五の apparently を削除。ただし、すべての高度において正方形であるかどうかは不明である。
- 29 娑婆世界の須弥山ではないが、「大華(あるいは大きな蓮華か)の如し」と解釈が可能な内容が次に見られる。『資料集』六九頁、四一―一三に補

遺。『八十華嚴』(卷一一)大正一〇、五三下—五四上「彼勝音世界中。有香水海。名清淨光明。其海中。有大華須彌山出現。名華焰普莊嚴幢。十寶欄楯周匝圍繞。」

30 『資料集』三七頁、四一五—三〇 apparently を削除。

31 この点については異説もありそうである。後考を待ちたい。

32 『資料集』五五頁、四一八—五を参照。

33 『資料集』六九頁、四一一—六を補正。二四頁、四一二—六を参照。『俱舍論』の七山は、次の②から⑧である。①蘇迷盧(須彌山) Mt. Sumeru; ②踰健達羅(持雙) the Yugandhara Mountain Range; ③伊沙陀羅山(伊沙馱羅山, 持軸) the Īśādhara Mountain Range; ④竭地洛迦山(竭地洛迦山, 檐木山) the Khadīraka Mountain Range; ⑤蘇達梨舍那(善見) the Sudarśana Mountain Range; ⑥頽濕縛羯拏(馬耳) the Aśvakarīya Mountain Range; ⑦毘那怛迦山(象鼻) the Vinitaka Mountain Range; ⑧尼民達羅山(持邊山) the Nimindhara Mountain Range; 四大洲; ⑨鐵輪圍山 the Cakravāḍa Mountain Range.

34 ただし、『華嚴經』には、次の十山があげられている。『資料集』六九頁、四一一—六を補正。①雪山 Mt. Himavān in the Southern Great Continent Jambudvīpa; ②香山 Mt. Gandhamādana in the Southern Great Continent Jambudvīpa; ③鞞陀梨山(軻梨羅山, 馱羅, 毘陀, 持軸), the Īśādhara Mountain Range; ④神仙山(仙聖山, 蘇迷梨舍那, 善見), the Sudarśana Mountain Range; ⑤由乾陀山(持雙), the Yugandhara Mountain Range; ⑥馬耳山(頽濕縛羯拏), the Aśvakarīya Mountain Range; ⑦尼民陀羅山(魚嘴), the Nimindhara Mountain Range; ⑧斫羯

羅山(斫迦羅山), the Cakravāḍa Mountain Range; ⑨計都末底山(宿慧山, 竭地洛迦, 眾相山), the Khadīraka Mountain Range; ⑩須彌山 Mt. Sumeru.

思うに、『華嚴經』では、『俱舍論』に比べ⑦毘那怛迦山(象鼻) the Vinitaka Mountain Range があげられていない。もしそれをみると『華嚴經』について⑧斫羯羅山(斫迦羅山), the Cakravāḍa Mountain Range と置き換べよう①雪山 Mt. Himavān in the Southern Great Continent Jambudvīpa; ②香山 Mt. Gandhamādana in the Southern Great Continent Jambudvīpa および⑩須彌山 Mt. Sumeru を除けば、須彌山を取り囲む山脈は七山と解釈することもできる。『華嚴經』にあげられている十山については、唐の澄観(七三八—八三九)の『大方広仏華嚴經隨疏演義鈔』大正三六、第一七三六の次の内容を参照。丸数字は筆者が挿入。『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』(卷三六)大正三六、二七五下—二七六上「謂七金山。七重圍繞者。俱舍世間品偈云。①蘇迷盧處中(蘇即妙也。迷盧高也)。次②踰健達羅(此云持雙。以山頂有二道。脊山能持。此故以爲名)。③伊沙馱羅山(此云持軸。山峰上聳。猶如車軸。山頂持故)。④竭地洛迦山(俱舍疏云。此即西方樹名。大疏但依狀翻。不出其名。頽疏云。此方亦有。名檐木山。山上寶樹。形似彼故)。⑤蘇達梨舍那(此云善見。見者稱善)。⑥頽濕縛羯拏(此云馬耳。山形似彼故)。⑦毘那怛迦山(此云象鼻。山形似故)。⑧尼民達羅山(俱舍疏云。魚名其魚背尖。山形似故。華嚴音義釋此云。云持邊山也)。於大洲等外。有⑨鐵輪圍山。前七金所成。蘇迷盧四寶。入水皆八萬。妙高出亦然。餘八半半減。廣皆等高量。」「大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔」(卷73) T36, 579a 「然此十山。與俱舍論。多同小異。彼偈云。①蘇迷盧處中。次②踰健達羅。③伊

沙陀羅山。④揭地洛迦山。⑤蘇達梨舍那。⑥頽濕縛羯拏。⑦毘那怛迦山。
⑧尼民達羅山。於大洲等外。有⑨鐵輪圍山。前七金所成。蘇迷盧四寶。釋
於梵名。如昇須彌山頂品。然須彌處中。次七金繞輪圍。第九今有。十山爲
次。又別爲順十地。所出異故。①一雪②二香。俱舍九中所無。③三鞞陀梨
陀梨。亦云馱羅。下偈復云毘陀。則正當第三伊沙陀羅。此云持軸。與種種
持義亦大同。④四神仙。應是第五蘇迷梨舍那。此云善見。以仙居故。⑤五
由乾陀羅。即第二持雙。⑥六馬耳。全同第六頽濕縛羯拏。⑦七尼民陀羅。
全同第八。彼卻無翻。但約形名爲魚嘴。⑧八斫羯羅。同彼第九。⑨九計都
末底。義同揭地落迦。彼亦無翻。但說其相故。論經名眾相山。⑩十蘇迷盧。
全同第一。既加香雪。應除象鼻。三藏楚夏。既各不同。言詞輕重。難爲剋
定。」

35 ただし、『正法念處經』の四大洲の内側の山脈の様態については不明。同心
方形ではないかもしれない。

36 『資料集』七二頁、四一一―一九に次を補遺。『八十華嚴』（卷五二）大正
一〇、二七三下―二七四上「此閻浮提。有二千五百河流入大海。西拘耶尼。
有五千河流入大海。東弗婆提。有七千五百河流入大海。北鬱單越。有一萬
河流入大海。」

37 『資料集』七二頁、四一一―一〇。「八百万」を「八億」に修正。『華嚴
經』の原文「一億」は「一千万」を意味する。たとえば、次を参照。『探玄
記』（卷四）大正三五、一七四下「第八重照一億世界。西國數法有三種億。
一百萬。二千萬。三萬萬。下文百千百千名一俱胝。俱胝者此云億。是千萬
爲億。此中據千萬爲一億。」および前掲註13）拙稿、二〇一五年、三七頁下
の注三六。

38 『阿毘達磨俱舍釋論』（卷八）大正二九、二一七上「偈曰。中央二千半。高一
由旬半。有城名善見。金軟多愛相。釋曰。須彌婁山王頂。中央有大城名善
見。縱廣各二千五百由旬。高一由旬半。」

39 『資料集』六六頁、四一〇―一二に補説。

40 『資料集』三〇頁、四一三―一二を修正。

41 『資料集』一九頁、四一一―一三を参照。玄奘と空海は東は牛、南は象、西
は馬、北は獅子とする。

42 『資料集』The presence of the dragons を参照。

43 『資料集』六三頁、四一九―一四「歡喜近喜龍王」は歡喜龍王と近喜龍王の
二龍王であろう。『瑜伽師地論』（卷二）大正三〇、二八七上「有八大龍。並
經劫住。謂持地龍王、歡喜、近喜龍王、馬騾龍王、目支鄰陀龍王、意猛龍
王、持國龍王、大黑龍王、鬻羅葉龍王。是諸龍王。由帝釋力。數與非天。
共相戰諍。」なお、九竜の近くに見られる船と魚は、次に関連するものであ
ろう。ただし、詳しく正確なところは後考に委ねたい。『六十華嚴』（卷
五九）大正九、七七七下―七七八上「價寶珠亦復如是。處生死海。菩薩摩訶
薩。以大願船。載入解脫城。聲聞緣覺。諸功德寶。所不能及。」「六十華嚴」
（卷五九）大正九、七七九上「譬如有人。善入大海。而不沒溺。摩伽羅魚。
所不能害。菩薩摩訶薩。亦復如是。以菩提心。入生死海。不為生死。之所
染汚。亦不證實際。聲聞緣覺。摩伽羅魚。所不能害。」「八十華嚴」（卷七八）
大正一〇、四三二下―四三三上「菩提心寶。亦復如是。住於生死。大海之
中。菩薩摩訶薩。乘大願船。深心相續。載之來入。解脫城中。二乘功德。
無能及者。」「八十華嚴」（卷七八）大正一〇、四三三中「譬如有人。善入大
海。一切水族。無能為害。假使入於摩竭魚口。亦不為彼。之所吞噬。菩薩

摩訶薩。亦復如是。發菩提心。入生死海。諸業煩惱。不能為害。假使入於。聲聞緣覺。實際法中。亦不為其。之所留難。」「探玄記」(卷二〇) 大正三五、四八八下「摩伽羅魚者此云極大之魚。謂是巨鼈魚也。」「大智度論」(卷一七) 大正二五、一八五中「如船入摩竭魚口。」

44 東大寺大仏蓮弁図と『探玄記』の関係については、次を参照。前掲註17) 拙稿、二〇一四年。

45 東大寺大仏の意匠は、『六十華嚴』を本にし『梵網經』をもつて援用したものであろう。次を参照。前掲註13) 拙稿、二〇一五年。

46 この点は、「図が興福寺を拠点に展開した法相系の図像の系譜を引き、それを華嚴を奉ずる者たちが追認した図像なのではないか」といった点を検討する上でも重要になってこよう。次を参照。稲本泰生「東大寺二月堂本尊光背図像考…大仏蓮弁線刻図を参照して」(『鹿園雜集』六、奈良国立博物館、二〇〇四年)、四一九一頁、五三―五四頁。

47 なお、瑜伽行唯識派の論書などによれば、すぐれた者には同じところに次に記されるような浄土が見えるらしいが、この点についての検討は、今後の課題としたい。『攝大乘論本』(卷三) 大正三二、一五一上―中「復次。諸佛清淨佛土相。云何應知。如菩薩藏百千契經序品中說。謂。薄伽梵住。最勝光曜。七寶莊嚴。放大光明。普照一切。無邊世界。無量方所。妙飾間列。周圍無際。其量難測。超過三界。所行之處。勝出世間。善根所起。最極自在。淨識為相。如來所都。諸大菩薩。眾所雲集。無量天、龍、藥叉、健達縛、阿素洛、揭路荼、緊捺洛、莫呼洛伽、人非人等。常所翼從。廣大法味。喜樂所持。作諸眾生。一切義利。蠲除一切。煩惱災橫。遠離眾魔。過諸莊嚴。如來莊嚴。之所依處。大念慧行。以為遊路。大止妙觀。以為所乘。大

空無相。無願解脫。為所入門。無量功德。眾所莊嚴。大寶花王。之所建立。大宮殿中。如是現示。清淨佛土。顯色圓滿。形色圓滿。分量圓滿。方所圓滿。因圓滿。果圓滿。主圓滿。輔翼圓滿。眷屬圓滿。住持圓滿。事業圓滿。攝益圓滿。無畏圓滿。住處圓滿。路圓滿。乘圓滿。門圓滿。依持圓滿。復次。受用如是。清淨佛土。一向淨妙。一向安樂。一向無罪。一向自在。」「佛說佛地經」(卷一) 大正一六、七二〇中―下。『解深密經』(卷一) 大正一六、六八八中。関連するものとして、次もあげられよう。『無量壽經優波提舍願生偈』 大正二六、第一五二四。

48 Howard, *The Imagery of the Cosmological Buddha*, pp.65-70, p.117, p. 119. 前掲註14) 松本伸之論文。

49 諸仏典に記された須弥山上空の天については、次を参照。Ataru Sotomura, *The Buddhist Heavens* 天 : *Source Manual for Iconographic Research on the Buddhist Universe, Part II*, Nalanda-Sriwijaya Centre Working Paper No 18 (Apr 2015), http://www.iseas.edu.sg/images/pdf/nsc_working_paper_series_18.pdf

図表出典

図1、東大寺大仏の台座の蓮弁。筆者撮影。

図2、蓮弁概略図(松本伸之氏論文より)。前掲註14)、五六頁。

図3、東大寺大仏蓮弁須弥山図。前田泰次ほか『東大寺、大仏と大仏殿』奈良の寺一四(岩波書店、一九九三年)、二五頁。

表1、諸仏典の内容と東大寺大仏蓮弁須弥山図との対応関係。筆者作成。
その他の図は、前掲註5)『資料集』より。ただし、「改」は修正箇所あり。



図1、東大寺大仏の台座の蓮弁

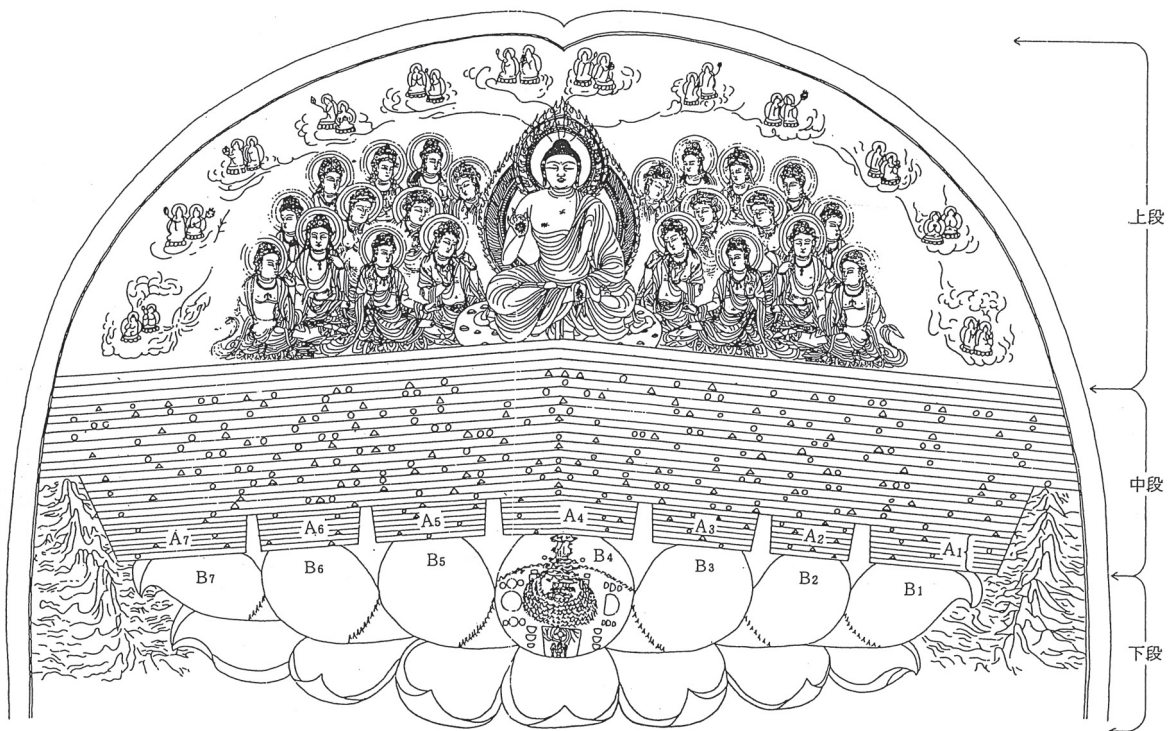


図2、蓮弁概略図（松本伸之氏論文より）

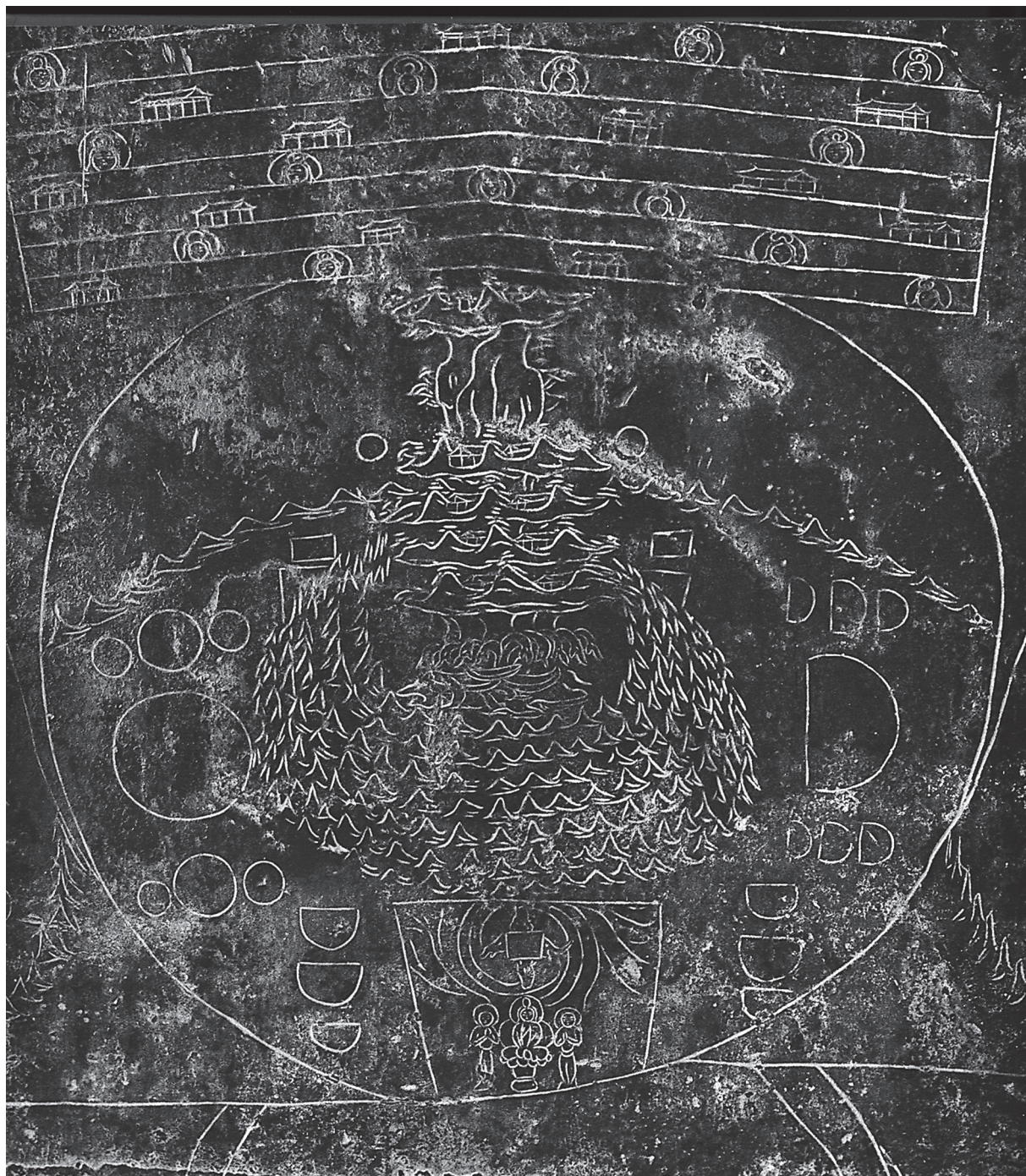
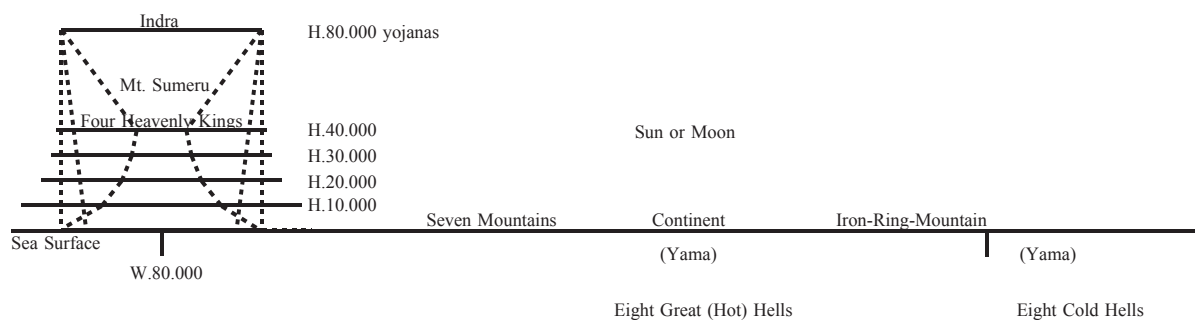


图 3、東大寺大仏蓮弁須弥山図

表1、諸仏典の内容と東大寺大仏蓮弁須弥山図との対応関係

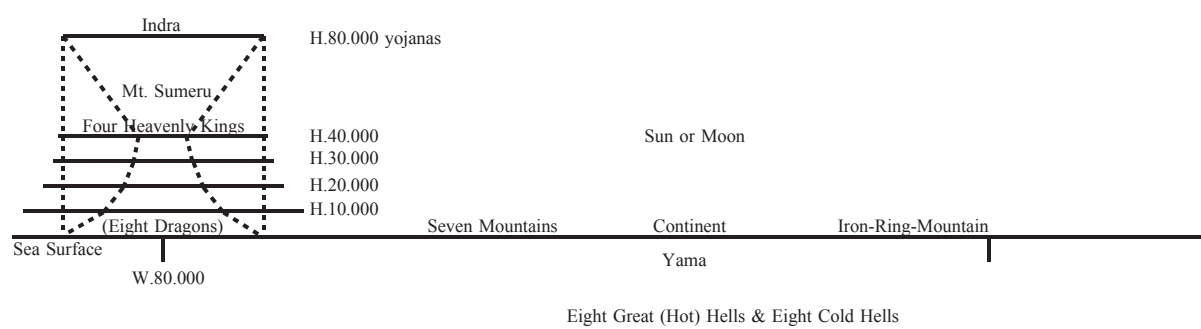
	(1) 須弥山の高度	(2) 須弥山の平面	(3) 須弥山の断面	(4) 須弥山山頂の四つの峰の位置	(5) 須弥山の側面の張り出し	(6) 須弥山を取り囲む山脈の数	(7) 大鐵圍山（大金剛山）の存在	(8) 須弥山を取り囲む山脈の様態	(9) 四大洲の位置と形	(10) 中洲と小洲の存在	(11) 帝釋天の善法堂の位置	(12) 四天王の居所の位置	(13) 無熱惱池の四つの獣口の配置	(14) 須弥山の麓に竜	(15) 日月の位置	(16) 地獄の位置	(17) 閻魔王の居所の位置
①『俱舍論』	○	○	○	○	○	○	△	○	○	△	○	○	△	○	○	○	○
②『世記経』	○	○	△	△	○	×	×	○	×	△	○	○	×	△	○	○	○
③『起世経』	○	○	×	○	×	×	×	○	×	△	○	○	○	△	△	○	○
④『華嚴経』+『探玄記』	○	○	△	○	△	△	○	△	△	△	○	○	○	△	○	○	○
⑤『瑜伽論』	○	○	△	○	△	○	△	△	○	△	○	○	△	○	○	○	○
⑥『大智度論』	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	○	×	○	○	○
⑦『婆沙論』	○	○	×	○	○	○	△	○	△	△	○	○	○	△	△	○	○
⑧『順正理論』	○	○	×	○	○	○	△	○	○	△	○	○	△	○	○	○	○
⑨『立世論』	○	○	○	○	×	○	△	○	×	×	○	○	△	△	○	○	○
⑩『正法念処経』	○	○	△	△	△	△	△	△	×	△	○	○	△	△	○	○	○

秘密曼荼羅十住心論



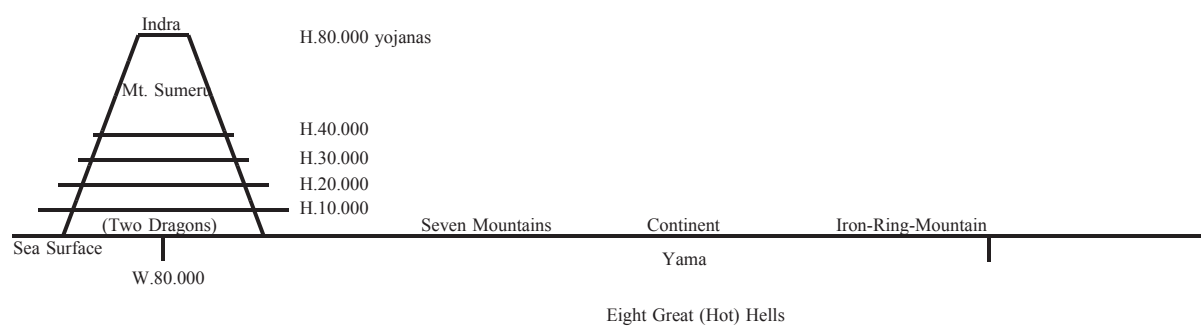
資料集 p.9, 3-1-1.

阿毘達磨俱舍論



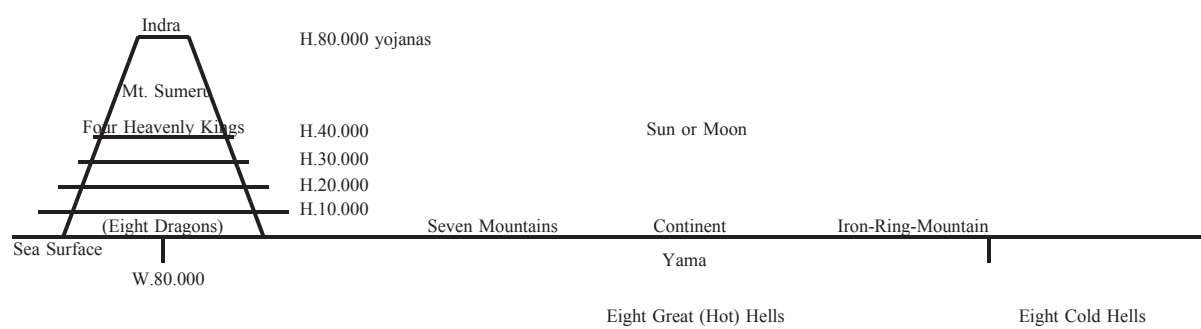
資料集 p.9, 3-1-2.

阿毘達磨大毘婆沙論



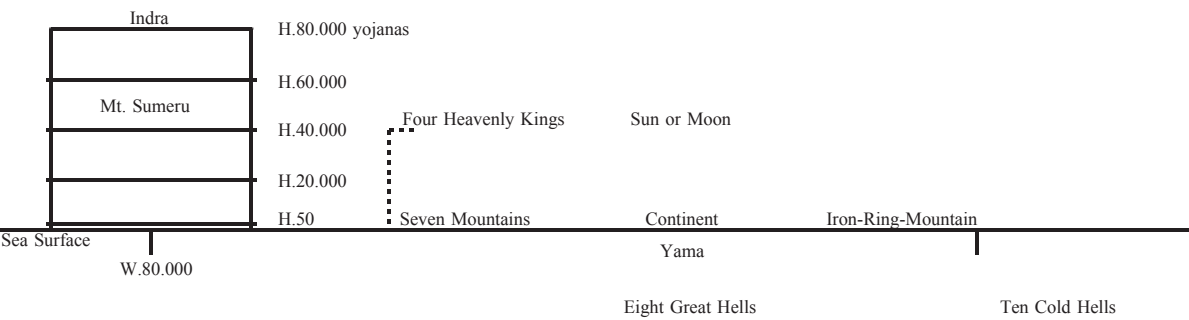
資料集 p.10, 3-1-3.改

阿毘達磨順正理論



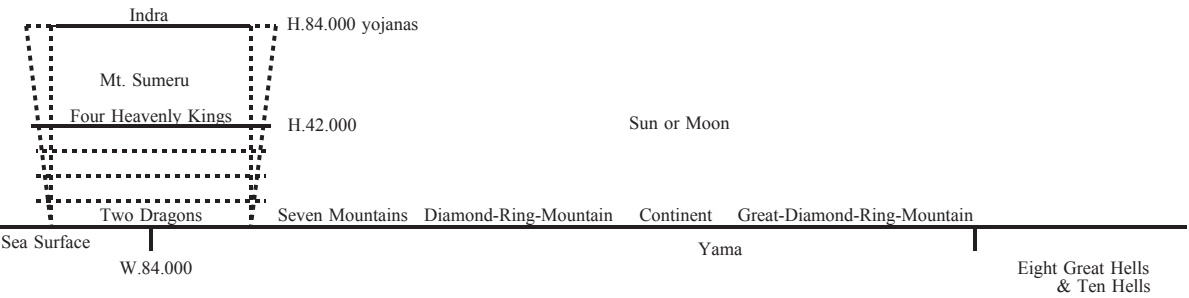
資料集 p.10, 3-1-4.

佛說立世阿毘曇論



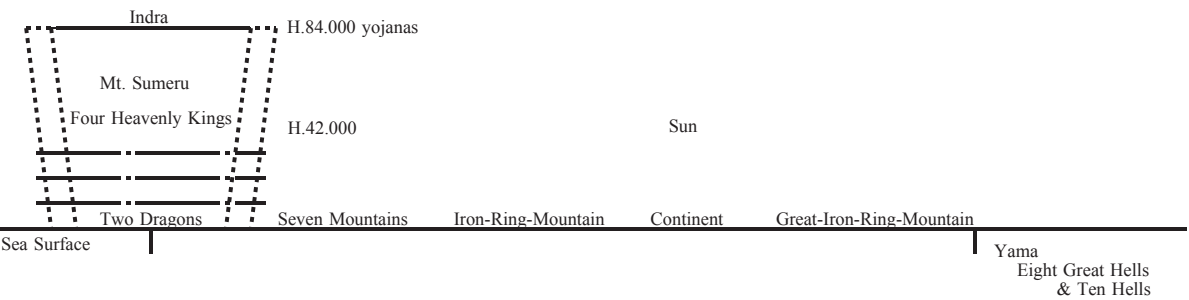
資料集 p.11, 3-1-5.

世記經



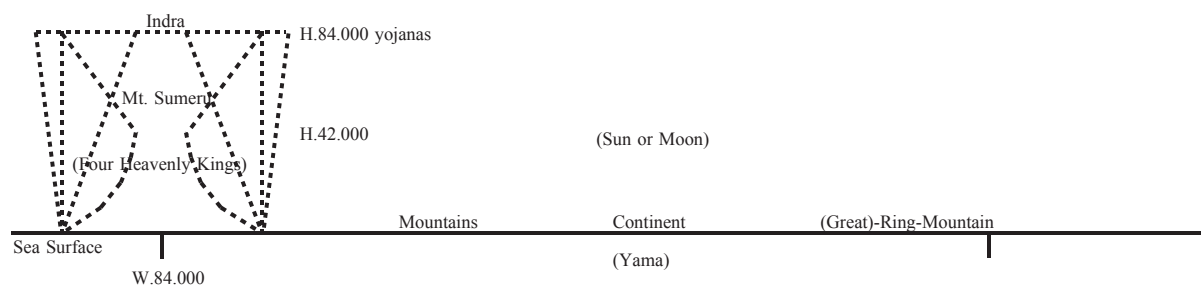
資料集 p.11, 3-1-6.

起世經



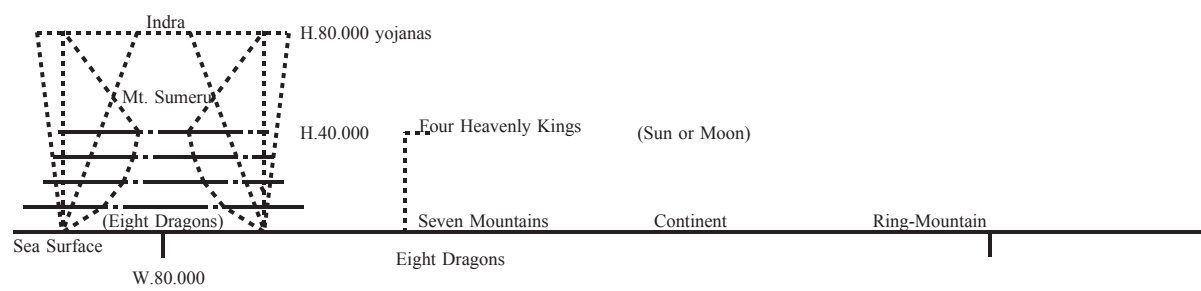
資料集 p.12, 3-1-7.

正法念處經



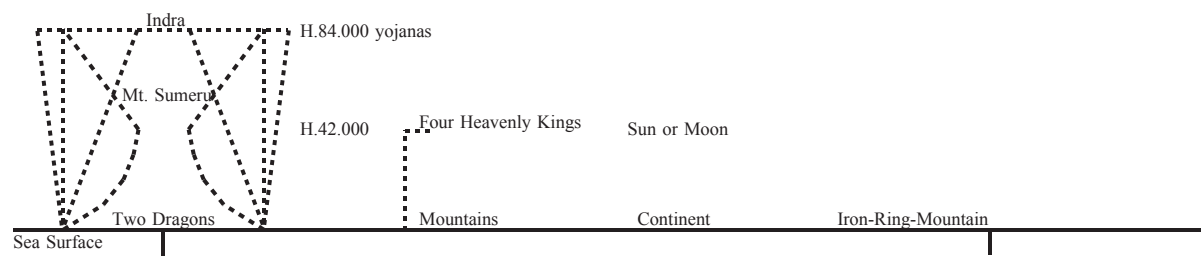
資料集 p.12, 3-1-8.改

瑜伽師地論



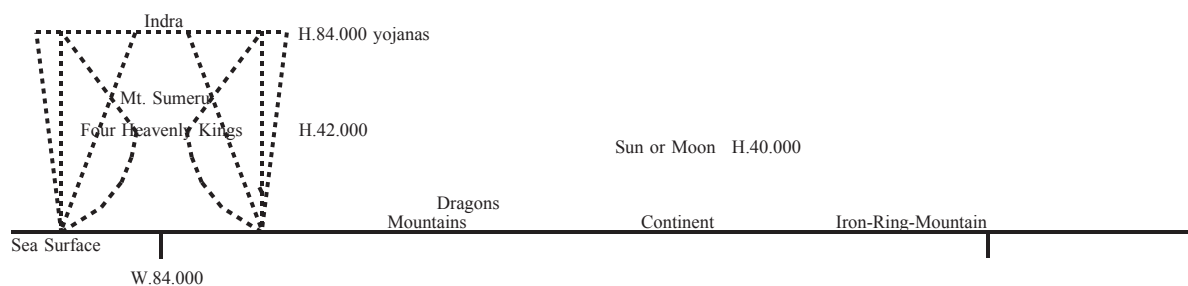
資料集 p.13, 3-1-9.改

大智度論

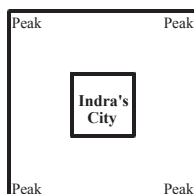


資料集 p.13, 3-1-10.

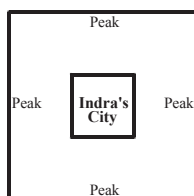
大方廣佛華嚴經 華嚴經探玄記



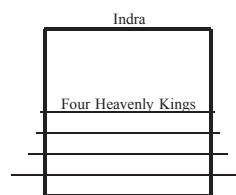
資料集 p.14, 3-1-11.



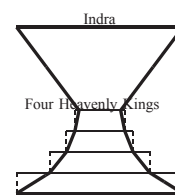
1) Jūjūshin ron, Jushe lun, Posha lun, Shunzhengli lun, Yuqie lun
十住心論、俱舍論、婆沙論、順正理論、瑜伽論



2) Lishi lun, Qishi jing, Tanxuan ji*
立世論、起世經、探玄記*



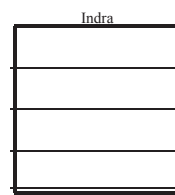
1) Jushe lun 俱舍論



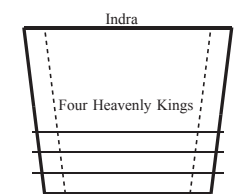
2) Jushe lun 俱舍論



3) Posha lun, Shunzhengli lun
婆沙論、順正理論



4) Lishi lun 立世論



5) Qishi jing* 起世經*

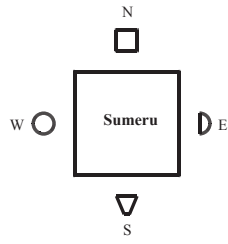
Indra 帝釋天
Four Heavenly Kings 四天王

資料集 p.14, 3-3. The Four Peaks 四峰 at the Top of Mt. Sumeru

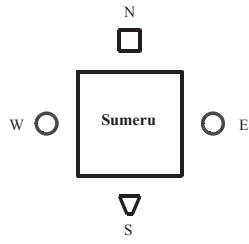
Indra's City (Sudarśana, City of Splendour) 帝釋天善見城
* Eight hills are located to each of the four directions outside the city.

資料集 p.14, 3-2. The Cross-Sectional Shape of Mt. Sumeru 須彌山
with the Four Terraced Ledges 四層 (四級)

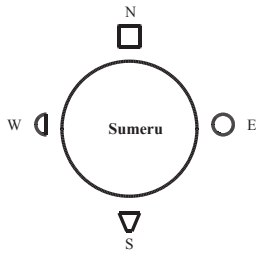
* The exact width is unknown.



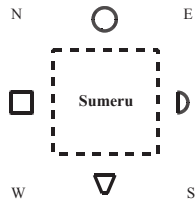
1) Jūjūshin ron, Jushe lun, Shunzhengli lun
Yuqie lun* 十住心論、俱舍論、順正理論
瑜伽論*



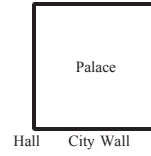
2) Lishi lun 立世論



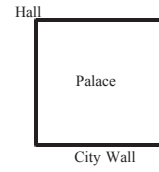
3) Shiji jing*, Qishi jing*
世記經*、起世經*



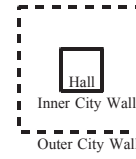
4) Zhengfa nianchu jing* **
正法念處經* **



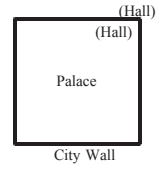
1) Jūjūshin ron, Jushe lun
Posha lun, Shunzhengli lun
十住心論、俱舍論
婆沙論、順正理論



2) Lishi lun 立世論



3) Shiji jing, Qishi jing
Zhengfa nianchu jing*
世記經、起世經
正法念處經*



4) Yuqie lun** 瑜伽論**

資料集 p.15, 3-5.改

The Four Great Continents 四大洲 Surrounding Mt. Sumeru

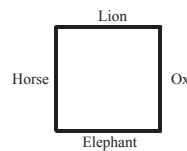
* The direction of the half-moon-shaped continent is unknown.

** It should be turned 45-degrees to the right.

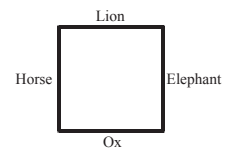
資料集 p.15, 3-4. Indra's City 善見城 and His Assembly Hall 善法堂 at the Top of Mt. Sumeru

* The outer city wall is unknown.

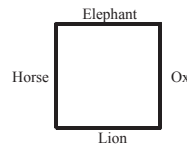
** The hall is located inside/outside the city wall.



1) Jūjūshin ron
十住心論



2) Poshalun, Qishi jing, Dazhidu lun, Tanxuan ji
婆沙論、起世經、大智度論、探玄記



3) Shiji jing 世記經

資料集 p.15, 3-6.

The Animals' Mouths of Lake Anavatapta 無熱惱池 (阿耨達池), out of which the Four Great Rivers flow

Workshop Proceedings
**MODES OF REPRESENTING SACRED SITES
IN EAST ASIAN BUDDHIST ART**

March 2016

A World with Mt. Sumeru as Represented in a Eighth Century Petal from the Great Buddha's Lotus Pedestal at Tōdaiji Temple	SOTOMURA Ataru	1
Notes on Jātaka Imagery in Fifth to Seventh Century East Asia: Intersections of Discourse and Choice of Subject Matter in Relation to Jātaka Locales, Charitable Giving (Dāna), and Passing through Kalpas	INAMOTO Yasuo	33
Images of Vulture Peak in Early Japanese Buddhist Art: On the Bronze Relief “Vision from the Lotus Sutra” at Hasedera Temple, Nara	TANAKA Ken'ichi	59
<i>Mahāprajñāpāramitā Sūtra</i> in Japanese History	KAMIKAWA Michio	83
What Can Be Learned about the Mountains Wutaishan and Kinpusen from Paintings of Manifestations of Avalokiteśvara	MASUKI Ryūsuke	89
The Development of Avalokiteśvara Worship at Mount Putuo and Its Imagery in the Southern Song, with Reference to the Seated Guanyin at Sen'yūji Temple	NISHITANI Isao	113
<i>Go Tenjiku zu</i> (Map of the Five Regions of India) and the Buddhist Worldview in Medieval Nara	TANIGUCHI Kōsei	141
Manifestations of Sacred Sites: The Varying Modes of Representing Mount Potalaka in Medieval Japan	SHIMIZU Ken	155
Bodhgayā: From Tree to Temple	Michael WILLIS	220
(Japanese translation by NAIKI Satoshi)		
Representations of Sacred Places in the Buddhist Art of Early Historic India, with Special Reference to Narratives of the Buddha	SHIMADA Akira	244

This publication comprises papers presented as part of the “Modes of Representing Sacred Sites in East Asian Buddhist Art” project under the direction of Inamoto Yasuo, Associate Professor, The Institute for Research in Humanities (Jinbun Kagaku Kenkyusho), Kyoto University

東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態

平成二五年度～平成二七年度科学研究費補助金 基盤研究（B）研究成果報告書
課題番号 二五二八四〇三〇

平成二八年三月発行

編集・発行 研究代表者 稲本 泰生（京都大学人文科学研究所）

印刷 株式会社 田中プリント

〒六〇〇―八〇四七

京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町六七七―二